

# 念佛踊

(日本書紀卷二十四 皇極天皇三年)

秋七月に、東国あづまのくにの不盡河ふじのかわの辺ほとりの人、大生部多おほふべのおほ、村里の人に虫を祭ることを勸めて曰はく。

「これは常世とこよの神だ。この神を祭る人は、富と命を得るのだ。常世の神を祭れば、貧乏人はいなくなり、老人は若返る。」と言う。

是これに由りて、加勸ますますめて、民の家たからの財宝を捨てしめ、酒つらを陳ね、菜・六畜な むくさのけものを路みちの側ほとりに陳ねて、呼ばはしめて曰はく。

「新らしい富が、やって来たのだ。」といふ。都鄙みやこひなの人、常世とこよの虫を清座しきいに置き、歌ひ、儼まひ、福さきはひを求め、珍財たからを棄捨すつ。都かつて益ます所無くして、損費つひえきはめ極て甚はなはだし。

(常世とこよの神、めでたや)

此の虫は常に橘たちばなの樹なに生る。或は曼樹ほそきに生る。其の長さ四寸よき (食偏あまりに「斗」)、其の大きさは頭指許おほよびばかり。其の色は緑みどりにして黒き点まだらあり。其の貌かたち、全養蠶もはらに似たり。

**A** **B** **C** (八王子)

- 融通念佛、一遍いっぺん申せば、一度のらいはを、逃のがると申す。  
融通念佛、南無阿彌陀。
- 融通念佛、二遍申せば、日本の浄土へ、参まいると申す。

融通念佛、南無阿彌陀。

三 融通念佛、三遍申せば、三途の御河おかわの、ごはんの念佛。

融通念佛、南無阿彌陀。

**D** (小河内、念佛)

月と入ろ、アレ、山の端に、月、アレ、山の端に。

わが親の、佛に成るを夢に見た、

嬉うれしながらも濡ぬるる袖そでかな。

**E** (一遍上人「聖絵」四)

はねばはね、踊らばをどれ春駒の、

のりの道をばしる人ぞしる。

ともはねよ、かくてもおどれ心ごま、

彌陀みのりの御法きくと聞ぞうれしき。

**F** (一遍上人「別願和讃」)より

身をくわん観くわんずれば水の泡きえ 消ぬる後のちは人もなし

命をおもへば月の影いでいるいき 出入息いでいるいきにぞとどまらぬ

人天善所にんでんぜんしょの質かたちをば をしめどもみなたもたれず

地獄鬼畜うけのくるしみは いとへども又受うけやすし

眼まなこのまへのかたちは 盲めしひて見ゆる色もなし

耳のほとりの言の葉は 聾みみしひてきく聲ぞなき

(遠州大念佛、豊岡村)

高木山 高きすすきを刈りわけて、  
親の御墓<sup>みはか</sup>へ 花立てに行く

平等施一切同発菩提心往生安楽国